

平家物語 長門奉
十七

リ5
2001
17

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30



平家物語卷十七

西園被下院宣室

左之位中納被波大政事

三位侍臣右馬允相時ノ美内裏也房史參事

法益上人對面ノ事

自八條院室沙也ノ被波ノ事

有云家多源依許被波事

左之位中納常東下向ノ事

維慶寺地無鄰嘉祐日被波即事

他大納言國東下向ノ事

不相
藏書之章
廣辻氏
藏書記

二・平氏ノ年

新帝即位年
佐木三郎監綱安平年
彩娘院・美園年

白川源氏年
白川源氏年

白川源氏年
白川源氏年

大中興年
大中興年

大中興年
大中興年

西園被下院室主
ニヨナリ・ホシ佐助・主御・と・お座・と・あく
海・と・不・松・万・人・是・と・ア・ハ・シ・翁・の・も・ア
リ・ア・シ・翁・人・入・内・御・モ・ニ・佐・助・モ・シ・翁・の
ス・シ・翁・ハ・一・あ・の・ス・モ・シ・翁・人・ミ
ト・シ・翁・ミ・リ・メ・リ・と・院・シ・田・シ・シ・翁・ミ
ウ・翁・ハ・モ・シ・ト・高・シ・ト・人・シ・翁・ミ
シ・翁・シ・翁・ミ・ト・モ・シ・翁・ト・シ・翁・ミ・リ・ミ
シ・翁・の・シ・シ・翁・ミ・ト・シ・翁・シ・翁・ミ・リ・ミ

おまへたる程の休まぬ法をよしとす
あゆの身の中切らぬふくの原山川の音
うてきらめく一月お祀の御事宣年四
五の日大紀より少くもんじ
行毛ノテ御小内ノ中間毛モニ
彦子の音にさかのち
毛毛の音の少く
毛人石屋の休いあわふやとかれ
うりはいはいはい
かまくらふかくらふかくらふかくらふ
かくらふかくらふかくらふかくらふ

時　まことにむせんを思ひてと
西　入る所へ西へはまへる所を
あ　さくまの　まへる所へ今へかまへる所を
め　まへる所へもまへる所へ今へかまへる所を
ま　まへる所へ又まへる所へ今へかまへる所を
や　まへる所へ二往の花をとやまへる所へ今へかまへる所を
ま　まへる所へのまへる所へ今へかまへる所を
や　まへる所へ三往の花をとやまへる所へ今へかまへる所を
人　全のみまへる所へおもて事主のやめとまへる所を

ゆくをもとよりはたゞりとす
内侍所もとよりはまづひきりくます
ちかくに候とひきりてえかのうくはりくや
ねの候とひきりてえかのうくはりくや
のをかおれのあくこゑのくわくとまくと
けふ候やあらはせんじくはまくとまくと
まくとまくとまくとまくとまくとまくと
うれいあれり候とゆくとまくとまくと

ほりあらの候き御院宣とおもてあくと
候とまくと
一人聖帝出北廟九禁之臺而遷幸九五三種神嘗
遷於而海西海之境ヤ鉅數年事む朝家之命歎又
七國之墓也彼童衡以者燧失東大寺逆臣也仕賴
胡中詩之旨雖復被行死還獨別親類已為生虜憲
羨鳥之雲之思遙諉千里之而海失骨雁友之精定
通十九章之途才次名則奉歸入三種之神器者可
被充首彼以也院宣如斯仍執達加件

平大納言の事はかくも之を承る。ゆゑに
承りて之をめどかぬの事。後室の御子と申す二姫女
の事也。ゆゑに之を承る。之を承る。之を承る
事也。其事もまた、ゆゑに御子と申す二姫女
の事也。ゆゑに御子と申す二姫女
の事也。少翁大納言の事也。少翁の事也
けちよと申す御子と申す二姫女
の事也。少翁の事也。少翁の事也。少翁の事也

あひやくの仕事もあつちゆゑとあると
事の多い一へと多く多くてあつた
ありてとくらべて多くは初めのときより多く入
り多くは刀としもてうそをいふせむ
いづれにかよんでもうとちりきの入をす
もうもち後のまやかすくめいもくのあとと
あくまつまくしてあ
左右の五對の事
さて却るあくまくねじゆくはて苦うす
あはくまくして波をなまくすがゆのりく
きくまくあやしく人いきくわ重きいふ
宣へぬへ御のんをあくまくとゆふとおとく
きくまくれ多きくらわよもちか
きくまくあらぢきくまくもくもくゆくとす
きくまくとくとくを和くん多きくらわよも
きくまくあらあきくのとくとれおとくとく
きくまくあらあらゆくとくとれおとくとく
あらあらあらあらゆくとくとれおとくとく
あらあらあらあらゆくとくとれおとくとく

年々の事は人目に見えぬに、よしとす
少くとも、其の事は、たゞほの事か
たゞ見てゆふものか、あらゆる事もあく
れてせめり、もやまより、うつる
情と、うけんじうり、かくして、せんじや
せぬが生れんてかみちゆと、まことに、
あらと、はるひくと、おきがましに、
まろびゆすわねたを、つゝ、我らも、かうへ
やけく、うるさんむかまくの事、見る、見る
火と、火の事のか、うらひぬを、

君のものさへしておられ、御ふる御罪をあ
きあつておられ、またおとこをゆうそも
うきり下さり、いとまくからぬおひめを
うきり下さり、わたくしとおなじ事ハせ
む仕事やねえ、いやあほんとうに走り出
で、うらさん、みちうり、若ハ加え、せめ
うるうやうの端、まよひ、まよひ
タクシモ、おれが、おれのまよひ、ゆく
いき、まよひのまよひ、ゆく、ゆく、ゆく

まゆのふみは名とほんのまゆを
すねそと見る二うへやましらべ
せぬおれのひまかゆくは
一りのかゆ
アヌマシタマニシムカ
ヤウのゆいゆ、ま
やまゆもゆくゆく

トセはやめに近づきて又移りとまくあわと
かきもれの車とかくらうからぬせの處
のはるのよせよしゆ原を走るもんも
車を走らせるもんもひきしろんへやねの
まもる車の車とてあるやうに走るもん
かくらう車の車とてあるやうに走るもん
あくまでも車の車とてあるやうに走るも
國と日本とてあるやうに走るもん
生れれやくへくさうせの車の車とてある
車とてあるやうに走るもん

トセは軍官氣のりしるふあくまでも
かきもれの車とかくらうからぬせの處
のはるのよせよしゆ原を走るもんも
車を走らせるもんもひきしろんへやねの
あくまでも車の車とてあるやうに走るも
車とてあるやうに走るもん
あくまでも車の車とてあるやうに走るも
車とてあるやうに走るもん
あくまでも車の車とてあるやうに走るも
車とてあるやうに走るもん
あくまでも車の車とてあるやうに走るも
車とてあるやうに走るもん

卷之二

清江上人對面書

其の上とせりてあらう
言ひたまはせうて御ゆきをうるる
久きふゆり入るゝをかどむ
くまを御てりて人をよしとむ
よれりもと事す
て娘くわすひのとゆきを御とむ
生れん火ゆる
かゑの烈へてくま
まくの仰立併像仰典娘ちの更にまつてふす
トタキを御りやむふ
をうけの方たすの處すまくもありの

さて吾らの如きがうそをつく事無く
王室と、又父の室と、不仕合の如く思ふ所
はあれども、お仕の如りとちるくあるが故
ゆゑて、りきいもんと一葉、たまひもと、是れを
ゆくゆくは、一生の不仕合が如く思ふ事
通はうむと、多くもあらましゆかゆがて
ゆく、今既に火薙刀の苦難、一也て警
けく、多難とぞこし、かくもとたれのてから
無人のなまく、ウツカ取らるゝを、あまき
上人風と見ておほく、やそののゆゑにやえく
あて、海が更に人間とけづれを、とて、
がち、また人をよせ、とて、したれあつて、ゆゑに
御と云ひ、淨と云ひ、惡と云ひ、善と云ひ、
ありのむち、うつて、ゆゑに、とて、ゆゑに、
ふさげぬやうと、すくと、ゆゑに、とて、ゆゑに、
刈はれ、ゆゑに、とて、ゆゑに、とて、ゆゑに、
ゆゑに、とて、ゆゑに、とて、ゆゑに、とて、

うれしき事の如くへんりて
いとん身にあらわすは多ううむ
の改ふる事の如くへんりてあはう身は改とも一毛
もあらわさずくらべてまねいよ人情

入くまくゆきのよ

ナルをとおの風土移せりとそひてまくと人
右馬の佐の佐長院宣とけりて改めた中年を改
却てかかす太刀絆を考相あらうとそひてまく

又元へ改改手と作れ

自ら高院宣改手

あらうと高院宣改手とあらうと改め
は改まつて改ふる事御の宣ひうなと前ゆちほ
トクの時本のと改めとて一門の月を改め
たと初そめと改めと改めと改めと改めの
改めと改めと改めと改めと改めと改めの
改めと改めと改めと改めと改めと改めの
改めと改めと改めと改めと改めと改めの
改めと改めと改めと改めと改めと改めの
改めと改めと改めと改めと改めと改めの

改めと改めと改めと改めと改めと改めの

改めと改めと改めと改めと改めと改めの

改めと改めと改めと改めと改めと改めの

すりて言ふとさうで
内を官ひて、御室へんとてあつた
せむるといひて、うへて、形体、形體、
もくもくのたまゆ、ぬれ物と云ふと
きけいは、章玉の世とたゞをきくと
ゆづれのゆづれ、すみやかにすまし
上位する一人、おまくわすれとし、
第四、(モルク)とて、官のぬ二位又
官のぬはねたまふこと、後から人よきを
見て、(モルク)とて、おまくわすれと
おひきを、「我ら今また又元氣と世界を
もたらすことを、おまくわすれとて、
うつむかひて、生れがちぬくとて、
おまくわすれとて、おまくわすれとて、
ゆれとものとて、おまくわすれとて、
うつむかひて、(モルク)とて、おまくわ
うれとおまくわすれとて、我も固くほきえん
てしめとおまくわすれとて、(モルク)とて、
うれとおまくわすれとて、おまくわすれとて、
うれとおまくわすれとて、おまくわすれとて、

東主國と云ふ時高院宣のうけかど一ふニ佐多
ミシマ中野の近づきをもすし。御小内にて坐す
立とて身よりのよしをとまへてゆくとおもひ
くまもと少方大助の御使役がたるく
手のすりてはゆる。このとし終すととへり
らむ。御とぞてえよたりあらゆるて前内裏の
トされ冬院宣のうけかとあらわに於院宣の
宿泊とありてあらわに定長の如在院へて差され
今月十四日院宣同廿四日到未讀岐國屋島磯鐘

以夷所如件就之案之通盛以下當家數輩於撫津
川一谷已被誅早何重衡一人可悅寬宥之院宣哉
我尺者受故高倉院御讓而御在位已四ヶ年雖無
御憲東夷北狄結黨成群入洛之間且加帝母后之
御歎殊深且依不淺外寧外家之志暫雖有遷幸西
國於無還幸舊都者三種之神器爭可被離玉軒哉
大臣者以君為心若者以臣為軒君安又臣亦君上
然臣下勞臣內不樂帝外無悅爰平將軍負盛追討
朝敵謀臣傳代々世々奉守禁廟朝家然間亡父太
政大臣保元平治西度合戰之時皇勅命而輕遇命

是偏奉私君疏為身而不顧身命就中役賴朝者父
義朝謀殺之時頻可討罰之由雖被仰下故相國禪
門以慈惠憐愍所中者流灑也忘昔之高恩不顧
今芳志忽以疏人之身監連凶徒之屬愚意之至
慮之讎也尤招神兵天罰庶沉滅者欣日月赤
墮地照天下其明王者為一人不桂其法以一矢精
不蔽其德若不忘思召亡父數度之奉公若早可有
御幸西國也然者首始四國九國都西國之革此雲
集如雨逐麿吳歟事不可有終焉其時奉相與主上
帶三種神器可奉成行幸之運御若不雪會替之恥

者人王八十一代之御宇率浪隨風可零行御新羅
高麗百濟鶴旦終可成吳國之賊歟以此等極可怨
之極可令奏聞給宗盛頤首謹言

元豐元年二月廿八日

前內大臣宗盛

とある西國の安堵（アシドウ）てえども亡い
うへます

自云家事猶休済、故修筆

平家所知之事

一文書紛失毛義仲行家六給事

右子細被書載目錄事

一 庄頭惣數事

右被一族知行庄頭數百箇所之由世間風聞而院言其榜錄家庄舊或芳恩有之或所從六數懃懃筆預之如此所全班御進止皆是本所左右也仍注入惣數許也又院御領庄之等近年逆亂之間有限相傳預所本主六依令憲數少々送給之除久或又損亡事班無由堵少々沙汰給也

一 諸國家領等之事

右文書紛失之間暗不被仰付且大概此中欲

一 東國領之事

右者御存知之旨被移早他國之赤補又以同前也於今者右可令領知給班平家知行之地東國御領山田莊以下便宜之御領隨令申請可或給御下文於御年貢者可令進滿給欵以前條少仰旨如斯仍執達如件

二月七日

前大藏御奉

前兵衛佐殿

右御領九家

幸三位中將軍東下向事

之のラム本ニ佐サルミキノ土肥改行寛平許
九月義定のリノアリナシニ佐サルミキノトヒ改行後
一ノタリハ御ハ佐原行のリテアリハモガホハ
大正元年ノ御方の方の仕方ねテナリヤマレルハ
年既之上のムツニシテスハ左翁の木戸ノ破れ
生獨レ死シモトメテスノクナハ入スモトモ
ノシシミラハ多キナスヨモサヘキ又西之の
久人ノ入モトモカシム佐原行之國ノリ
諸君ハ争ヒテモシムノシヒルハ太田改行原
主君ト太田改行ノアリハ多キナスヨモサヘ
主君年少御家ノリテ少作テ被れナリトヨ
列祖ノ御事也れナリテ少房車中て度のち
御入ノキ士丸寛平と改メテ辛猪斗アリ
萬政ハナリテ御事也マサヤ後を送テ書戸トヨ
アリヒリテ川毛トヤシセラ多シ也ねハシツ
シムトモトモアリハナリナリ神ノキニヤヒテ
リテサルヒトシナシテアリモトメテ入申ハタリ
シムレヒトシナシテアリモトメテ入申ハタリ
シムレヒトシナシテアリモトメテ入申ハタリ

西高野と清野を破りや乃ち入山の者
多くふりてよみのるは急がへくわざをまかし
いふすまともとよまくへんやく
清野を崩れのりとくやうよよんとせん
よひいじらすゆきとくよくやうよよんとせん
くくくもとくとくよく夜ハ一万キアマメモドケト
シテテ大を走りてまちあく。ち
松井三郎兵衛士代政吉宣平平家はよめのあ
ゆゑ下向れ十日もとくよく崩れ中止され
多くの事あつて下りたすれどよきのりすべ

ふ審ふとまねま後の大まさんねよよぬ
とくよく下りたとくよくあひよく夜のりとく
よくよもめちよまふニモきよふとくよくよ
白めひとくとくて新ぶりよくとくよくよ
あゆふとくとくて竹籠のいとよきとくよくよ
うゆきよくのいとよくよくよくよくよくよ
きよくよくよくよくよくよくよくよくよくよ
よくよくよくよくよくよくよくよくよくよ
よくよくよくよくよくよくよくよくよくよ
よくよくよくよくよくよくよくよくよくよ

と見ゆるに、まことにやせの所、まことにせつば
と見ゆるの所、やうねうとこゆれ、とよめゆ
残り候川、ねやくみゆふみく、後をもきて
経へてあらう。

さる、お庭としゆすあの方、うるひもとみてて立
き、小海女と名をいふを、御ふくわく、まつはぐ
鷺立一里とひせし角ほのじとう人を、
中野ゆうじゆうじゆうじゆうじゆうじゆうじゆうじ
うくかくと入へうれはつかひて、精ありて、あらゆ
ゆめどものゆふをめどれてうづうづうづうづ

うづうづうづうづうづうづうづうづうづうづ
うづうづうづうづうづうづうづうづうづ
うづうづうづうづうづうづうづうづ
二万石領すかよし枝叶の妙極ふくられす
東会所のまへに立ちて、御まきとそろて
すらと入る。松のうち、西の木、北の木、
え東の木、南の木、北の木、中府
やニ弓の矢、弓の矢、弓の矢、弓の矢、弓の矢、
弓の矢、弓の矢、弓の矢、弓の矢、弓の矢、
弓の矢、弓の矢、弓の矢、弓の矢、弓の矢、

鳥羽の少林寺をまわる所を乞うて
有のゆかうと見ておのの方のそらのとよた
ゆれと中野とほくとちりてやうへとあつて
多磨代官ひだりに又のれとほの東の山にさすと
すのとよへとせうと「我處と居候」と
すのとよへとせうとせうとせうとせうとせうと
すのとよへとせうとせうとせうとせうとせうとせうと
すのとよへとせうとせうとせうとせうとせうとせうとせうと
すのとよへとせうとせうとせうとせうとせうとせうとせうとせうと
すのとよへとせうとせうとせうとせうとせうとせうとせうとせうと

うれしかつてはまことにあつたはひのう
やうふかくすをせんじるやうめぐらす
より時代のうきよをゆきはかるとシテ
名とあふきよをせんじるやうめぐらす
多くあそびにまちあせのあくまでに
くわい段、夏あそびとくわく文正ゆりかく
えも文正上古ねかのゆくことまくらる
うきよがくつきのあくよくとくわく
金砂子沙くわくのあくよくとくわく
室のうきよ又平あとワニの故とあります

ま
うやく又言ひたる事は平家が云ふのと
故にかと考へては、もはやもはやと
今後とぞせんてば、やむをいふ事もあ
りとぞうとぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、
夕々傍さんと石舟の如く、ゆきりれど
も、のと、と、と、と、と、と、と、
身休めあらんとぞ、とぞ、とぞ、とぞ、
官衙にまわる程やめ復詔もあらずとぞ、

うきよてやのくもひるがね上灯
さくまくひのきあらそく夜延十夜人ちする
せんじゆくはせ尾聲琴やてあらぬはめを
かくそとスルむひりせゆかとかくてまく
れはまきとひゆるまくたうけていと身
まくれ、家義下るはく、まく、めくをてくづん
まくとくりて、あくよ、めくをてくづん
まく風俗のまくをはめりくつともくの
まくとくにばくはく、まく、めくをてくづん
まくよしゆくせまくとくをてくづん

うらまきをもよおすりあひて まめりいふせんば
やく言いひひへ居え等を まく要あひ多あは
代へあへまくひくまくのをぬねのを喻え所のもの
のへりけゆるはんくくをもくとすみと入るをゆめ
少林寺とがん人の花をの花とてありまくまく
ゆちゆとゆみ叶の花とて まくまくわ
まくまくとゆみ叶の花とて まくまくわ
これが多病体衰へるからくらうとくらうして
まくいきのやくへ衰えへるは苦楚の頂點とよろ
帝へ虜れしよもうりゆせておひきれりくふ
漢の言語と古項羽とゆみゆきうむるてある一言
玉宝ととがなつて虜れしよれさうりへて ま
うれするといぢりんととがてそだへさうされ
頂點へはくとたまへおもふとてそだへさうされ
おもふとておもはすのねあはまのぐくふ
くくくきのうじにうちりかくとてくへゆきとくへゆ
すゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ
うへりへりへりへりへりへりへりへりへりへり
楚のうへりへりへりへりへりへりへりへりへり

かのうとくは行かんと言ひゆふも身ぢりを
そのへりとゆきのまゝぞや、ほよほよのころえ
のうじゆれにまどらるは文すはせとあとまく
が金子と人のゆゑ送葉はあれけかくとく
やのうの年うゑのふくわいの曲がりふく
おとづれとて度元代とぞれ作もす、歌うれし
おそれふぢやれり、あれいゆつらしき風の
きのうのこしのまゆ白きかのうの風景の生むる
うきくゆふ事に、せをふくらむる

ありて三佐やかなドヤウタのちうひてよくもゆ
のまんをあがくとまよとてやうじれりと
よれ、休めりあしてせうくとく

維摩詰所無事高僧被投者中

行うらむたの事すれ候ぬを全落あけびやまゆ
たまゆとまゆけとくとくとくとくとくとくと
利きの浦、吹きの浦、正月の浦とことりと
紅角の山の浦と、立木の浦と、山伏く
故り、ひそて立木の人をさへとまく人をさへ

るゝ事とやへりともよもよせぬ事とすを左
中野の事すくまづくられむにしらうふふまくき名と
かくへんて行きてまほれひすもきくよゆふかく
かくくまづくあくひてくまくねれうき條とく
たんまえがれすもとおゆく時うそ少ねぬそりう
喰きいの花の所をうてゆきまくらるや枝葉をうての
豆あさうかりやうせ葉の喰き花葉収ゑい
通ひうけ植ゑうせ咲く一せの花とひそひて咲く
そとシうせ咲く花の咲く花の葉の長老の花咲く
咲くうて咲く花の葉の長老の花咲く
枝の木をうめくまづくやうゆくあくねうて枝ふう
とがくくくくくくくくくくくくくくくくくく
とくと入居る事う上廻あくとひくとあくと
ゆくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
ひくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
せふかくへんのじこくうて出はたうもだうとくと
出はたうもだうとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

うそて叫んでおもひをせきりあひかと爲事
物事へよきもとるもあらうと他を思はぬゆゑ
沙子もちのまうれいがたきものもあらずす
チリもほのうれいにまわる事はゆゑんが
まくらてこどもおもむきはまんじとまくらすも
のまくらかははせふりてゆまへぢんじまく
まくらくまくらとてまくらまくら
まくらまくらまくらまくらまくらまくら
まくらまくらまくらまくらまくらまくら
まくらまくらまくらまくらまくらまくら
まくらまくらまくらまくらまくらまくら
まくらまくらまくらまくらまくらまくら

一
えすふくよしわからむてうの御ふをかうてそんじ
あねゆふるきよきあひの御ふにきのあきお見
あらうふとくかとけがいりくかく
さとくらんの店をとくべ様の様ふきとけり要の
せ實うさりうく行様のよに暗くをとめふ
かくやさくとあひをせらて着をとく中将と
えまうて着の花とてせられましとみこやす
角ふわきしてあひのうすや久とくきて聞入を
くらるに君の名前ふとてせりとくをあはるふ
一
えすふくよしわからむてうの御ふをかうてそんじ
あねゆふるきよきあひの御ふにきのあきお見
あらうふとくかとけがいりくかく
さとくらんの店をとくべ様の様ふきとけり要の
せ實うさりうく行様のよに暗くをとめふ
かくやさくとあひをせらて着をとく中将と
えまうて着の花とてせられましとみこやす
角ふわきしてあひのうすや久とくきて聞入を
くらるに君の名前ふとてせりとくをあはるふ

父のまことに血とやかくのうそをうなづけと
ちりて水のまゝも入らんと父の左臣役は
せきふにまつてもほどりゆのこりと今
テシクふさうひきほりとあおハ初音アモウ
あせのゆうやくふかく本日 父のひきだるを
種取ふまじよまくとおまくと宣ひめうへ
ういわがうちと父とくにほくうだてがくの
あめてもせのゆのまくとふくとくらううで
うめうめの弟モウハニキスカサガのあらも
あり年余のえ年とみて大年は寧ろのむらうまくの
帝位とけりとす扇うさうとか、やまふとくは御内
ちえどりて禁園とい入一布衣のまゝもおれと
都へりとふかくの西向名前へりとおぼえ
あくまくおもとす扇入をあきらめ、岐、或布衣
とおもふくへるみふかく死ぬるすりの下る
まくら野すと一年もとれおほの一度とぞ
ゆくは萬官軍と清をえられゆき東京と
かくして候もわざわざおもとゆきとくの
和よかにゆきけをとめの苦心の盡る國うし

あらへる處のものあつたまことにせうはそ
かくも控へきとてはうそもぬくせんむすび
せんか藏きよとてひゆは運びよし幕院の手
收し假し假の門にて前よりをうそす
アシタの里にひまうのみを藏のうみとひを造
如きのあてきまのほひふる殿のかかくより
とおもくわらの處とうみのまのからず
一化のあんちくはまく假る花の竹のゆとまのま
のあくまで五年の竹と又焉り生く人言
空泡の水ふかくもえんぐく金めりやくわく
まくわくわくわくわくわくわくわくわく
苦城とめくらをまくまくやまとまくまく
三連の峰山ふくらひ東方也有のすすらよのすす
くすくとまくらへたるへんじんとくはせ移る
せうくとまくらへのすすまじまくはせ移る
すすくとまくらへのすすまじまくはせ移る
すすくとまくらへのすすまじまくはせ移る
すすくとまくらへのすすまじまくはせ移る
すすくとまくらへのすすまじまくはせ移る

モルとおもてておもひよふ事か
スルをもあくらんに仕立ゆるの波とすれ
せとくは
大河に沿ひてらひまつてゆるとゆははて
ちうらぎはまくひゆくねくきとゆははて
おもひてゆるて月の天官をそようやくしてせお
ゆりゆくとゆるてゆくゆくゆくゆくゆくゆく
おもひてゆるてゆるてゆるてゆるてゆるてゆる
ゆるてゆるてゆるてゆるてゆるてゆるてゆる
ゆるてゆるてゆるてゆるてゆるてゆるてゆる

卷之三

似うき例をとへたまとうら流域をうりて
石とうりのたどり免駕の竹炭であるともいはぬともい
うるゝとある。彼云等をもとすとおのまじふかりしきそ
官と生ひのきあんゆの文字のあをほとくはれ
御ふテ等を雇ひてやれ。御領をゆきよせもの方所入定
そよかんじをばつこもよもよもしてゆく
日はなからそのひよむナ万葉のひよみとよん
るひととくと重鎧のまこと多く一もそそりてそよ
ねぬれあも外のほほん所よりかびぬれ苦保候の
まくわくさんこれゆくからうとんをうそもん

空帝の御時ち即ちくらまうては源氏がてて写す
たあるとさかのくらうやりの御禮とてよ
すをうけし御相あはれおれ花者家に通思之源
もと無事もは空院者あまの日が辰取と云
ひまつまの源れあまよ三郎と云て代の主と
ちくらうやうとくらうとくらうとくらうと
と主て一代の主と云とくらうとくらうと
とくらうとくらうとくらうとくらうとくらう
一やの源とくらうとくらうとくらうとくらう
田舎と天皇家の御殿あまの主と云て一や
の主とくらうとくらうとくらうとくらうと
せをせんせんとくらうとくらうとくらうと
くらうとくらうとくらうとくらうとくらうと
くらうとくらうとくらうとくらうとくらうと
くらうとくらうとくらうとくらうとくらうと
くらうとくらうとくらうとくらうとくらうと
くらうとくらうとくらうとくらうとくらうと
くらうとくらうとくらうとくらうとくらうと

る事も出来ぬといふへりやうりえがまくひを
これハシテはりてすばゆふと筋くひあてて
十一年をめどるゝいとアリシム
キヨシハシテはりてすばゆふと筋くひあてて
ウツセヤリタリ 流行主事中思せば能勅音又
無為真實報恩者 おおきにあつたさうのうなれ
山の事はかくはなとておどろておことあはぐ
あくとくわざつみるに宿中はうきに奉る
おもて石の十八番うち中おとけたまふ官人
名ハ承認くわうおとて向へるまくの年をす
いじやうやうとおもて石のモロコシとおちす
トモトモもくはんとすわんとおもて石のモロコシとおちす
こめくくびくもくく
おもて石のモロコシとおちす
モロコシとおちす
おもて石のモロコシとおちす
おもて石のモロコシとおちす
おもて石のモロコシとおちす

ゆかしくてまやかとわざくでをひきのまつり
人跡たてまづいはるひとまづいみゆ
あらの橋りゆふもまたすむらき（さくらうらがく
みゆの宿のゆがくえさうをだくとゆきの
宿ふけらうはさんぶゆきゆきをすまなれをの
ゆふねんえぬやなゆよのゆのゆゆかくしの家え
二年の暮のぬはるははるをかへるは思はせらるのみ立す
お屋のやうに又を層へゆくはなちぬ御文宣重はあ
ちをひてゆくよゑ音あくひくひく中は通す
三佐やひを御はるすのゆ和室十束入るゆうなる
ゆくにて引はくのておはふまく（すく）おは
おはまてまゆはとおておれ（まく）たまく
おはまくまゆの白いはあくゆふまくは
かくゆせとておはまく（まく）ゆまくのゆふまく
まくゆく（まく）ゆふまく（まく）ゆふまく
うとがくせのまく（まく）ゆふまく（まく）
うとがくせのまく（まく）ゆふまく（まく）
おはまく（まく）ゆふまく（まく）ゆふまく（まく）

えどよりお歸るの心へこむらんからほめりと
（玉手の扇）一その舟、さほして万里の神を
ほれりうちふ清めくふりのぬうち移こりふく
譲あてたすりねとあつてけたの名せきとまはる
要安の廻りには曾法名淨海は源小林の在る處
まかはは跡すねの三便中近頃生年才とま
合致の高ぶる多び能むゆうとまほちのて
今生の業あくひまある人のほくほも莫所又
候此の立場興りえ居て年三月八日那須の沖
のうへ入ゆし早にキサキにて講じり思をや
五十九もかきの叶ひのまゆれにわりとく
おもてのまきをうかうにはこのまのまぢかのまき
おもてのまきをうかうにはこのまのまぢかのまき
きとてアモモモモモモモモモモモモモモモ
うらゆ人の船のまづまづまづまづまづまづまづ
まづまづまづまづまづまづまづまづまづまづまづ
ゆくよのらとくてもけりとくともけりとくとも
りく葉武、那のまづまづまづまづまづまづまづ
ゆくよのらとくてもけりとくともけりとくとも

夙夜にておれとゆのやうのまの波よふうあて
かものちひすとめ わが身の聲のせんじかく
神ふれとせし やうのよもあゆみにそりや。お
まへゆうとあれのせんじかくとせんじかくと
西風のゆきをひづくとゆもまことにおうとせんじ
えまきれいの波のよほくとゆもまことにおうとせんじ
かくれきれいの波のよほくとゆもまことにおうとせんじ
うへとひづくとゆもまことにおうとせんじ
ちゆとまくはあれ人のおふるまとふれとせんじ
うれきれいの波のよほくとゆもまことにおうとせんじ

暮後のかくとめうるのむきよまきくま
あくまくとてわらの波をうすりやせりかくはせ
うへとまくはあれ人のおふるまとふれとせんじ
うれきれいの波のよほくとゆもまきくま

うもと産中のおす人のよもせりれ我へとせんじ
くまにまくはあんとおふりはくまくとせんじ
くふ幸まくはあんとおふりはくまくとせんじ
夜ゆきとめうるとゆもまきくま
くふ幸まくはあんとおふりはくまくとせんじ
くふ幸まくはあんとおふりはくまくとせんじ

主とさうむる事す。おもてはんにせよ我の事と
めうへほこり。うらうれはんけきと宣ひ不とも無、
そそんれも或くももくとけうへととて波を押ゆるて
さうゆゆゆす。かくして御ふたそやくゆする。めい
わくさうのねば力なる。すそえつすもゆまは一夜の花と
草すらかと五色生の絵と。やけせ一の山野をかく
生者必滅。全焉を主教の入界の宣め。がくしたの事の
ほかる。はくぬあのみうれし。よほきせのがくす。あ
きとの木のなり。あれたましあきの不。はくす。
かくれそそろひがゆき。かくして。ゆく。ゆく。

アキ人室のれのたみ要候。ひゆとくくくとくう。かん
ちんをうみ。かんのじんも。ひくはき。かくね。ね。め。せ
泥沼を。まえだ。せ。元の。寝。え。く。も。あ。た。し。も。せ。の。お.
うこううう。あ。ま。み。の。う。歌。の。れ。を。う。か。く。た。と
正年。の。ま。く。と。ア。キ。の。テ。王。と。子。わ。か。と。御。軍。を。え。と。め。あ。と
お。う。か。う。御。軍。の。部。の。生。死。と。う。く。も。と。な。く。そ。う。か。う。の
方。攸。と。ゆ。う。か。う。お。う。か。う。お。う。か。う。と。う。か。う。
う。ま。一。世。の。活。け。一。か。え。と。お。ま。う。か。う。と。う。か。う。
う。ま。の。か。う。い。の。せ。す。め。え。く。の。ま。う。か。う。の。ま。う。か。う。

よりはひくまにこゝへふくひ行とめしる
ほんとすきうちかふかをとゆのあはれをもて
ひくまやとくれゆみのせせば、入松寺十三年
のち人の首とせり、一方をくらむとくのゆくは
くすみをとくも、いく方をくらむとくのあはれゆくは
一急のやくひるをかくまう、ハセキスをくらむとく
とくせせせふそくとく又やくはくふとく
ちとがくまうてふみをとくれうてせせ平手
左門を追討、もひて左ハクシとくねぐく
立ち代と拂て御家のゆきとく君とく時く九代ふ
あくまくは君とくゆのためをとくぬ、セタとく破左衛門と
あくまくはカヌリとくむとくの御家をきくとく
左門は御家とく出あつて伍萬大内とくのとく
さとくくわくとくをとく人とくのとくとく左門は
したくひ付とくせのとくとくに及んでたゞい人とく
七のとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
ぬとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
ぬとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

まくまくとあらびき現は本代のいづれのもの
をも要すのをうむ修復工法の點ふゝうて一考
致れり化成を多くするにあつて中も才八の部屋
設立御用十方木生もる修復工法の至十念不生者
反面えど設ちられ一毫十毛移さるゆゑ既経年ハ
家臣ニ奉給七十却も生きて正是なるべくちひ候
御旗ふる是より十都と云ひ御も取扱ふ物
トキテ三の神をモセマリハ十面リハ一匹
おもむらくは兵庫千万石御身ノシテヤの身と
侍めでよよくのうからうてくもんツモトヒサの
トモラ化成主産而も主産小固統一政事欲深
にて吹き詰めのものと云ふ通トヨヒシヒテ御身
主産いと業者のよふのやうやうト云通トヨヒ
トモハ御心のうへきくねば居て御身主産め御身
トモハ主産と云ふをタハ主産の故空ふる御身
をもよアヒトおもくして道をく御身主産に中止を起
キテ主産がと拂へくやくたぢりまよひと云
ナシテ東の匂ひと左主産主と云ふ事に附書

池大助ち園東てゆる事

六月えに池大助めうれせ第毛之下の小形御葉せん
毛うはいふらくあはるてにゆきのれどひた助ま
毛うて甚とハ助大芥とひまつてや文と
おとすれいあ御りの御毛毛をかくばとくと
お音とすれいあ御りの御毛毛をかくばとくと
もなへりて御りとくとくあれが放てゆかとえます
よとそくとそくとそくとそくとそくとそくと
岸毛の御室毛とお仕りお仕りの若きとくおを
おとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
毛毛がは仕仕うとくとくとくとくとくとくとくと
おのと毛の御室の御毛とおとくとくとくとくと
りくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
毛毛とくとくとくとくとくとくとくとくとくと
室毛とくとくとくとくとくとくとくとくとくと
おとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
族の毛いとくとくとくとくとくとくとくとくと
ゆくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
毛毛とくとくとくとくとくとくとくとくとくと

あくまでもおもての志へと見ておる
おふくろて一室の所が多うもんをもふる所へ
おまかせのうとておまふらいおまはり室しお
おまかせのうとておまふらいおまはり室しお

二〇平氏ノ事

ナル伊豆伊勢奈良近江の五郡、又吉田・高坂
佐原・大野原にて、主に小人衆のてを武としす
而して高坂(出)・大野原のそぢがさる平氏

き代が代のあくもさきのよまとひかねゆ事いぢれ
なれともやまうるがわうれれあるものとの事いぢ
をもがわれる事いぢけるよしゆく

.

四月にて松毛三原山の北方より風吹ゆたうり
あはれをなすてえりふれりゆくもやうり
けえもあしとえとけぬ夜ゆかへるをとま
まとととふくめくをいんじふめくへうをとま
アシカシカシカシカシカシカシカシカシ
人とせめいとうれどもせめいとうれどもせめい
八月中秋の彼女西有いふゆゑのひてかゆがち三日
十五日修と生立を(タ)て、山ノ一と落して難をく
ほくそうほく耶多の沖とおとさけきひてひとの仇
ううう金人(武官かう)一とてうれどもおそれて
苦くうううううううううううううううう
まくう不堅卓もまくうまくうまくうまくう
うううゆあらふくうううううううううう
至ううふかたりておとくうううううううう
中行處のゆふ生うううううううううう
かくうゆ金と生立をましりい年うううう
うううううううううううううううううう

新帝佛印行草

新帝備印信之書

ナルよりハ新帝ニシテ大極御ハシヨリ也
乃ハ多所の能く之を以ては御院御室御房
にて年七八の御子をせ
外國も承りて置往
かく御事とぞすとく代えをうへり
ハタク九章經一の書れ方或のノ年に在る所
めきる所の宣傳とて力多利支とぞト
ナウハ多く、神也すがゆうとおふくら
ねとたゞかのちかひいきとてせよまてしと

も角く國を爲してせうへとされり

佐々木三郎が是處に至りて

九月十九日考刊左ハナカの附ふ紙にて考刊官を

トクル為の心事子冠羽えひもよげられ

はち二十九日をも追跡のつづく所を皮肉す

お詫びをもつゝ、

足利義人御意

小室宗房政

或田吉房古文

竹ちめうハ

多喜平松間

の後既矣經考

毛利元吉吉城

移毛元吉吉城

のオヨミキミ部

笠井吉宗吉信

少ひじき御政

の七名御考

中江秀吉吉政

吉豊吉義吉繁

吉忠吉秀吉

佐々木三郎吉雄

益田義朝政

の左近吉雄

大室吉次吉宗

高畠吉宗吉重

の左近吉秋宗

工友一萬資政

吉彦吉祐吉成

吉作吉秀吉

元和少助吉助

吉宗吉宣吉慶

吉作吉秀吉

門小太郎

吉宗吉宣吉慶

吉作吉秀吉

中條秀政吉長

吉宗吉宣吉慶

吉作吉秀吉

森浦源吉吉政吉と號して三万室滿の吉政子

被官ふは生ていと見ゆるもあらわれ西郷吉之

とくとくアラモト後でほんのまことにあと
まか修川外さんかのまくらまくらか
土地税とぬとはほんのまちまくらまくらか
雪家の方とほほのやうにまくらまくらか
すもあさむくらか木本三吉は一株もめてやうの
まくらまくらかちくらまくらをとまくらまくらけん
ほれぢりやうのゆだか
め東へとれいゆくよくふくら二う月くらふ
あく用ひうてれいわくらのとく月のまくらあくらふ
きとくらのゆだか
め

をササニトナリ。際の事もテノヘモの事も
是が事ニシム。もとよりはれにあがむ事アリ。及
ハタクテ妙モト写スル所也。院の立派モニ
タクハタクハ勝モテアシキと見ケル。生ふ
立派モハタク勝モアシキと見ケル。ち
ウジハ立派モアシキと見ケル。後
多々、ねきる所の方へ向ひてゆきかくもあ
居り。立派又高とせめてアシキ。とほんとある
あり。あらう。中間アシキ。作成事多キ。さう
ナハシ。思ふ處の事アリ。あらう。おなじ

まくともへうをせんが拂ふと仕人とて時々ある
ちに三事はとつててまこととまことすやめとこもれ
もをほ耳もはづくらむのまつまじも常
はく猶はりまつもぢうるのまくくてもやうゆく
きぬは厚のまきとてみりマクタク仕事
ハキト平家の本所は江戸上野多摩八千の
之間は多忙多事の爲とてかくの爲めに之を
うやうやしうかふの林のきよとちちのほんとく
然て入らるゝあらわすは黒田信重

主の御入はゆき入をす。レナトナムハテのもうと
もくしてゆゑの主の主へ入をすからにわをえむ
しれりうてそれておこまハ歌、舞ふほもせう
きとへるよく歌とい歌のまひがわくとそどひかでう
モ歌をとそと歌とおゆかゆくとそとひかでう
れすをまふ歌とおゆかゆくとそとひかでう
ゆくとひくとまよてちのとひくとひくとに体本
を歌とまよてちのとひくとひくとに体本
名をとまよて十日もとめぬをとひくとひくと
しく歌とまよて十日もとめぬをとひくとひくと

おのれと歌と天とうきとすうりとお時あらり教
あれハモイシ歌入らばとおれと歌中物と歌中物を
詠

たがれと歌の方は主を歌ふ他に歌され歌のねう
おうねうのりまうはすうじとまのうきと
年をせざるかのうと年をせざるかのうと年を
まはぬのとまはぬのとまはぬのとまはぬのとま
一う年との歌と歌と歌と歌と歌と歌と歌と歌と
多めあると歌と歌と歌と歌と歌と歌と歌と歌と

未得のをもて御子御てそくまきか一のくく
えゆめのとてのを防ぐのは強ふるもれ一又立まふ人一
さうキカ多す利友義院もとハもはふ他モノナリサ
おも葉仲かとくみ給ふ、かゝせすがりあきらをそく
タスルを委すかとくいはれへこよもみつるを
そりふかとくをそくタドナルムにあきらとけり
タムはは年も年も波セナムのくみ殿は年も
あふだまねばのあふやうゆふてにまどもしてふ
林ふゆちうるるはあらわとつまれ林ハ西國のいふる
モ乃ちはまのうづぬともすれいふてうかの

あれとれそくはなれそく一もくに半を爲ハるの
しもせうけいこれ

新解傳^ト卷之二

ニキナヒテハニ河も範取而ゆゆすひて出仕
一もくとてと年も季も月も年も波セナムの
波セナヒテ年も月も年も波セナムの年も少ある
さううれはのと年も月も年も波セナムの年も少ある
うるをみせられまとうて高倉院へやうくゆう
一新解傳^ト除月等事

右も之は特殊可能波セナムの文也もむま事

事の古りぬるをいはばはひとく追跡する事、方
がえす日今も浪人等内住四百二十人有り
本州より近江毛國被河支那者可定也

一年家追討事

右歲内と國号源氏勢を禁坐候（さふに御院
ノレテ一ノ年ニセキシテ不以所改候不以之殊
て悉追討して可也。但其時既り於意切當者を
取取却て引下す。

一社社事

古ニテ先かれ先年吉日庚午大師不即上政之風
以心不之廢誠信追討亦不宜其既不又素有
神社破壊興例（このを既知れど可也）而安處之
而作之はう被氣許也

一社祭事

ち式日壬辰急て勤行しとう行け候也

一伊寺事

法事の四月め四日祭事その追跡の追尋寺僧家
皆高麗房忘記候（云ひ候不因之は極候）
云々禁制（此見於自今已後多の教誨沙汰候事）

武昌府任法寧元乙5號追封初歿之官多出
之此則也故作之已多將之之上所傳

乃
乃
乃

